

図1. 福島県立以下大学における大気中ラドン濃度の測定値(a)とその平均値からの残差(b)。(東北大学[課題番号:2906])

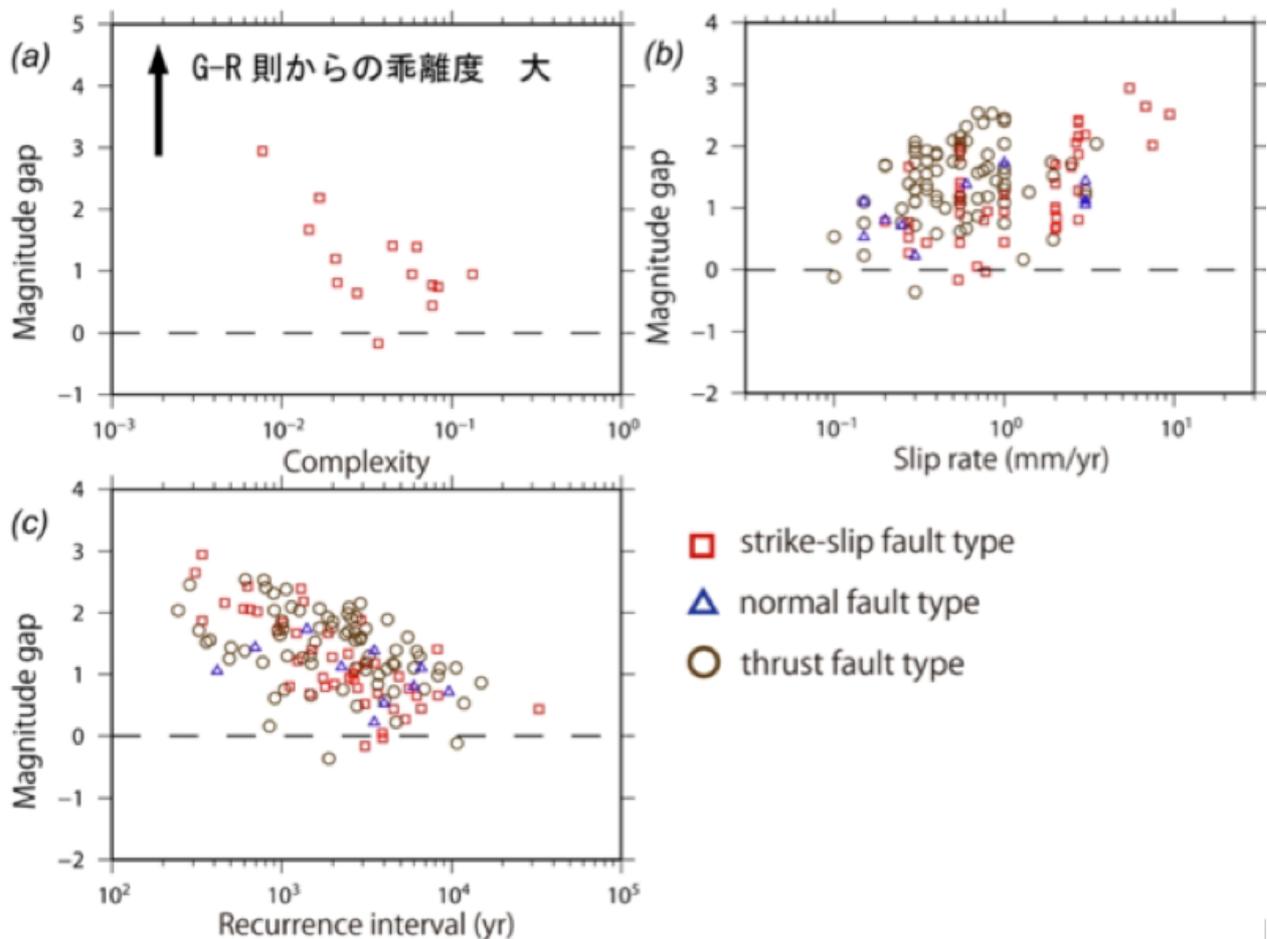


図2. 主要活断層帯周辺における地震活動度のグーテンベルグ・リヒター則からの乖離度と、断層パラメータ[(a)複雑度(b)平均変位速度(c)平均再来間隔]との関係。複雑度は活断層の単位長さ当たりのステップ数で定義される。マグニチュードギャップは、地形・地質学的な情報から推定される最大規模の地震のマグニチュードと、微小地震活動から推定される切斷マグニチュードの差で定義される。(東京大学地震研究所 [課題番号:1419])

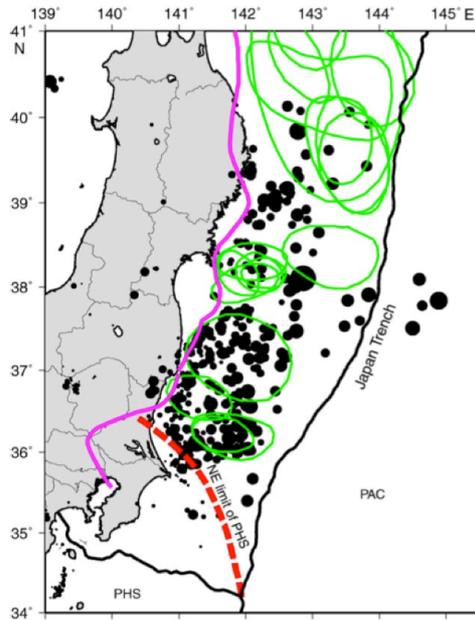


図3. 2011年東北地方太平洋沖地震の余震(黒丸, 1日間, 気象庁による)と1926年以降のM7以上の地震の余震域(緑丸, Uchida et al., 2009)。ピンクの線は、プレート境界地震の下限(Igarashi et al, 2001; Uchida et al., 2009)。(東北大学 [課題番号: 1210])

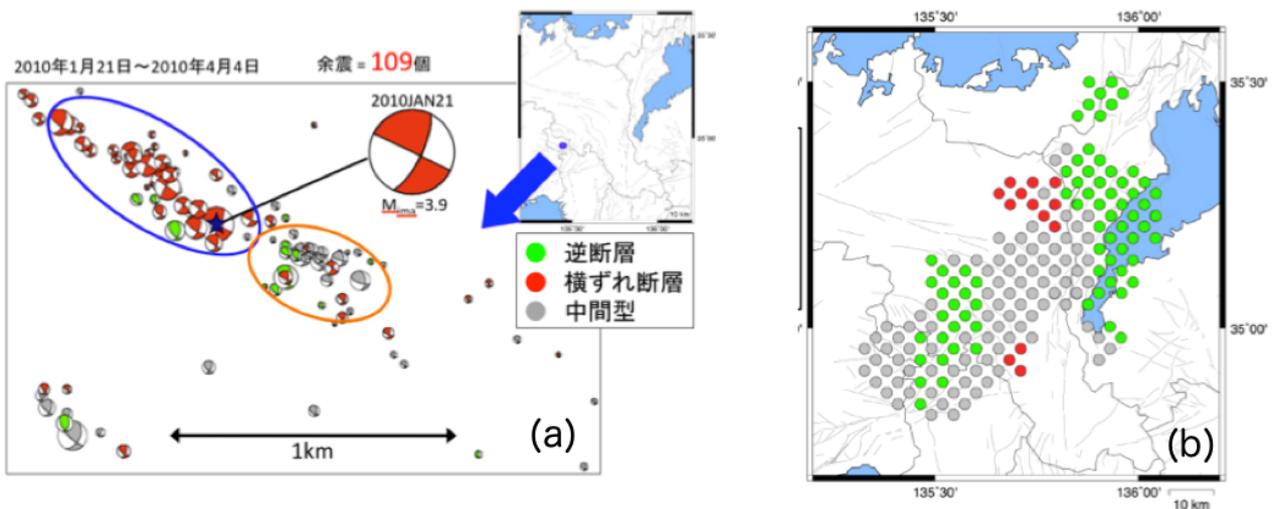


図4. 近畿地方北部の超稠密観測で得られた多数の微小地震メカニズム解からの結果。(a) 2010年1月21日大阪府北部M3.7の地震とそれに続く余震の発震機構。赤は横ずれ断層型, 緑は逆断層型, 灰色は中間型。(b) 応力場の空間変化。全領域で σ_1 は概ね東西方向。赤丸は横ずれ断層的な応力場, 緑は逆断層, 灰色は σ_2 , σ_3 が分離できない推定結果となる領域を示す。(京都大学防災研究所 [課題番号: 1811])